国際ロータリー第2780地区第1ｸﾞﾙｰﾌﾟ　WEEKLY REPORT MIURA RC

三浦ロータリークラブ週報

2012～'13年度国際ロータリーのテーマ

◇ 国際ロータリー会長
田　中　作　次　（埼玉県、八潮ＲＣ）
◇ 国際ロータリー第2780地区ガバナー
菅　原　光　志　　(鎌倉RC)
◇ 国際ロータリー第2780地区第1ｸﾞﾙｰﾌﾟ
ｶﾞﾊﾞﾅｰ補佐　鈴　木　康　仁(横須賀RC)
◇ 三浦ロータリークラブ
会　長　菊　池　　恵
副会長　星　野　　雄
幹　事　藤　　喜代司
◇ 広報委員会（広報.雑誌.ＩＴ）
委員長　鈴　木　正　孝
副委員長　大　石　精　一
◇ 例会日　毎　週　木曜日１２　時３０分点鐘
◇ 例会場　三浦商工会議　３　階　ホール
◇ 例会場所＆事務所住所
〒238-0243 三浦市三崎2丁目22番16号
◇ＴＥＬ 046(881)5111 ＦＡＸ 046(881)3346
◇ **Website ： http://www.miura-rc.jp**

ニコニコＢＯＸ集計報告

	本　日	前回迄	累　計
ニコニコ	16,000円	274,000円	290,000円
財　団	1,000円	51,000円	52,000円
ポリオ	0円	16,000円	16,000円
米　山	1,000円	36,000円	37,000円
周　年	0円	7,000円	7,000円
計	18,000円	384,000円	402,000円

２０１３年　３月　７日 第２４９８回 例会

◇ 点　鐘　１２時３０分
◇ 国歌斉唱
◇ ロータリーソング　『奉仕の理想』
◇ 四つのテスト唱和
◇ ゲスト・ビジター紹介
東京大学大学院理学系研究科　教授
付属臨海実験所　所長
海洋基礎生物学研究推進センター　センター長
理学博士　赤坂　甲治　様
交換留学生　ＤＥＳＡＲＴ　Ｍａｎｏｎさん

◇ **1. 会長報告　菊池　恵　会長**

本日は会長報告と言うよりも、ゲストの紹介と実験所の思い出のお話をさせて頂きます。

本日は油壺に有ります、東京大学三崎臨海実験所の赤坂甲治所長さんにおいで頂いております。実験所の正式名称はそこに書いて有ります様に東京大学大学院理化学系研究科付属臨海実験所といいます。明治１９年入船に設立され、我が国最初の施設だそうです。世界的にも知られた実験所だそうです。

後ほど先生から詳しいお話があろうかと思いますが、三浦市と実験所との間で昨年の３月、社会連携の協定が結ばれました。この協定は、実験所の最新科学情報や最先端の研究成果などを広く社会に発信していく事で、学術研究、人材育成、地域社会の発展に寄与することが目的です。

具体的には
①三浦市民に向けた科学教育や生涯学習の支援
②最新の科学技術や研究成果の発信と普及
③海洋教育の促進などだそうです。

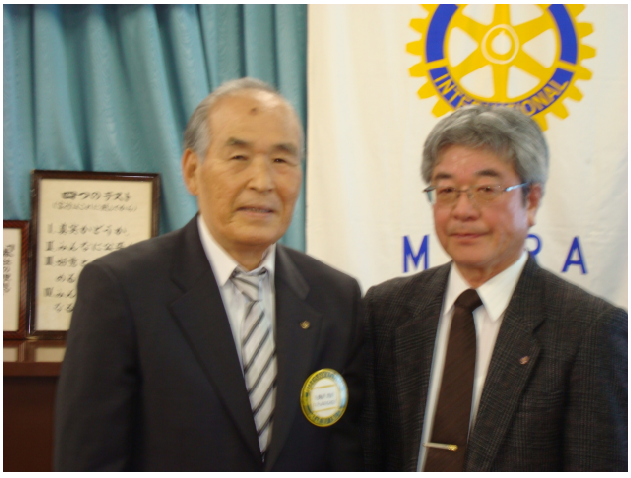
現在、学校との連携や海洋教育の一環として、海洋教育写真コンテスト「海の生き物」「海の風景とくらし」が行われて来ました。名向小学校での連携活動が紹介されている新聞を配布しております。油壺の実験所は、私どもは水族館のイメージが大変強いものがあります。ここに５０年前の写真があります。私が小学３年生の時の遠足の写真です。後ろに写っているのが水族館です。入り口に小さなプールがあり、大きな海亀が４～５匹泳いでいました。今でもその光景は覚えています。初めて大きな亀をみたので強烈な印象だったのかもしれません。また、亀のしっぽのところに緑色の藻のよ

うなものが生えていてまたビックリしました。浦島太郎が竜宮城から帰って来る時乗っている亀そのものがからでした。また、水族館の中は真っ暗でした。壁のところ明るい窓のようなものがあり、(２０インチのテレビ位の大きさ)きれいな魚が泳いでいました。５０年前の小学生にとっては夢の国であり竜宮城はこんな所ではないかと想像したものでした。今考えるとディズニーランドのようなところでした。もう一つの思い出は「クサフグ」産卵です。５月下旬から８月の間、新月と満月の夕方から夜にかけて砂浜で産卵行動が見られます。全国的に珍しいそうです。このように三浦の海は大変素晴らしい海と聞いております。

本日、先生にはお忙しい中時間をさいていただき、お出ましいただき大変恐縮しております。
しかも、本来なら９０分、２時間くらいのお話されるのが普通でしょうが、３０分という短い時間でのお話し、申し訳ございませんが宜しくお願いいたします。

◇ 2. 幹事報告　藤　喜代司　幹事

※お誕生日お祝い
　星野　英夫　Ｓ１９．３．２５
　長瀬　六朗　Ｓ１２．３．２４
※結婚記念日お祝い
　高木　　巖　Ｓ３９．３．　３
　星野　　雄　Ｓ４７．３．　５
　鈴木金太郎　Ｓ４１．３．　１
　大石　精一　Ｈ　７．３．　５
　安藤　征明　Ｈ　５．３．　６
　齊藤　昭二　Ｓ６０．３．１０
※ガバナー月信
※ＰＥＴＳ用資料
※３月例会案内　　横須賀西ＲＣ
※ロータリー財団ニュース
※IM開催案内　４月１３日（土）１２：３０点鐘　横須賀商工会議所１階→出欠確認中



◇ 3.出席報告　　荒　宏昭　会員

　会員総数２７名。本日出席１５名。
本日欠席１１名。出席率は５７．６９%。
ＭＡＫＥＵＰ
星野雄会員２回により、出席率は６５．３８%となります。

◇ 4.ニコニコBOX報告　　清水　俊行　会員

菊池　恵　赤坂先生、卓話宜しくお願い致します。
星野　雄　東大臨海実験所所長赤坂様ようこそ。本日卓話宜しくお願い致します。本日結婚祝いありがとうございます。
藤喜代司　赤坂先生、今日はよろしくお願いします。
松崎貞男　本日早退のお詫び。
安藤征明　結婚記念日お祝いありがとうございます。昨日は結婚記念日であると同時に、妻の誕生日だったのに、朝起きて何も言わずに「いってきます」と言ってしまいました。当然ながらおこられました。
辻上伸子　鈴木会員、先週は手に汗にぎってお話を聞き入りました。強い方には大きな試練、どうか全てがうまく運ばれますように。赤坂教授、お話し楽しみにしていました。
高木　巖　結婚祝いお礼。赤坂先生、ご本ありがとうございました。

◇ 5.委員長報告

職業奉仕委員会　芹川　直行　委員長
　職場見学会について

◇ 6.卓話　　赤坂　甲治　様

医学・バイオに波及する臨海実験所の活動と海洋教育

東京大学大学院理学系研究科附属臨海実験所（通称：三崎臨海実験所）は、1886年（明治19年）に、世界一海洋生物の種類が多い神奈川県三浦市に設立された。創設以来、多数（昨年度は延数2万5

千人）の国内外の研究者・学生に活発に利用されており、生物学の発展に大いに貢献をしている。

設立当時はダーウィンの進化論が発表されて間もなくであり、生物学の中心的テーマはダーウィンの学説の検証であった。そのため、臨海実験所では、さまざまな生物を採集して記載し、比較して進化の道筋を系統化する博物学が行われていた。やがて、実験を主体とする生物学が興隆し、飼育が容易で、どこでも使えるマウスやショウジョウバエなどのモデル生物が主流となり、臨海実験所の存在は忘れられかけていた。一方、遺伝子科学が発展し、ゲノム情報のすべてが解読されるようになると、たとえば、ウニと人間は、見かけは全く違うが、どちらもほぼ同じ数と種類の遺伝子を持つことが示され、現存するすべての生物は共通の祖先から派生し、共通の遺伝子を持ち、共通の仕組みで生命活動を営んでいることが明らかになってきた。これは、ほぼすべての動物に当てはまる。現在では、生命の設計図といわれる遺伝子が同じであるにもかかわらず、進化に伴って、なぜ多様な生物が生じるのかが中心的な課題となっており、多様な生物が得られる臨海実験所の役割の重要性が再び増してきている。また、すべての生物は共通のしくみで生きているため、単純で多様な海洋生物から実験に適した生物を選び出し、実験生物として利用して、生命現象のしくみを解明し、それを人間に適用することも盛んに行なわれてきている。クラゲの光るタンパク質は、特定のタンパク質の動きを生きたまま追跡することを可能にし、生命科学や医学に大きく貢献している。ウニは細胞分裂の調節を担うタンパク質の発見に貢献し、がんの発症機構の解明につながり、ヒトデは白血球、イカは神経伝達のしくみ、軟体動物のアメフラシは記憶のしくみの解明に貢献し、研究者はいずれもノーベル医学・生理学賞を受賞している。三崎臨海実験所においても、海洋生物を活用して医学・バイオや産業に結びつく研究を展開している。

海は海洋生物のみならず、エネルギーや鉱物資源などさまざまな恩恵をもたらす。海に囲まれた日本国は海洋を活用すべきであることは明白であり、国は2007年に、海洋の有効活用と、海洋を活用する人材を育成することを謳った海洋基本法を制定した。東京大学はこれを受け、文理を問わず海洋にかかわる教授250名以上からなる東京大学総長直轄組織の海洋アライアンスを立ち上げ、その一環として初等中等教育における海洋教育を推進する研究を行う海洋教育促進研究センターを設立した。8年後の学習指導要領改訂では、総則に「海洋」が加えられると予想されるが、初等中等教育現場の先生方の大部分は海洋に関する知識がなく、生徒に教えることができない。三崎臨海実験所は海洋教育促進研究センターの活動においても重要な役割を担っており、2012年3月に三浦市と社会連携の協定を結び、三浦市をモデルとして海洋教育促進の実験を行うこととなった。一般的な指導書は、幅広く漠然としているため、実際には役に立たない。学校の近くの海を活用する地域密着型の教材を先生自ら作成することにより、地元で繰り返し学ぶことが可能となり、活動するたびに教材の内容が充実する。三浦市名向小学校では、先生と児童が作成した地域密着型教材を活用する海洋教育の実践が行われている。今後は、三浦市全域、さらには神奈川県、関東一円に展開し、全国の国立大学臨海実験所と連携して、生物のみならず、地質、大気海洋、水産漁業、海運、観光、歴史も含めて全国各地で地域密着型教材を開発して、いずれは全国海洋教育教材大全集に編纂し、海洋立国日本を支える人材を育成していく予定である。